

アリストテレス『弁論術』におけるディアレクティケーの役割

高橋 祥吾

1 問題の所在

本稿では、アリストテレスの『弁論術』で語られているディアレクティケー（問答法、弁証術。以下、「問答法」と表記）について、『弁論術』における役割を考察することを目的とする^{*1}。

アリストテレスは『弁論術』の冒頭を、「弁論術は問答法のアンティストロポス (*ἀντίστροφος* : 対の関係) になっている」という一文から始めている (*Rhet.* 1354a1)^{*2}。このときアリストテレスは、彼独自の弁論術を新しく確立するために、すでに確立した問答法を用いていると考えられる。それは以下の理由による。

まず『ソフィスト的論駁について』第三十四章において、アリストテレスは、弁論術がすでにある程度の技術の蓄積があるのに対して、問答法のような論理学に関わる仕事はこれまで蓄積がなく、自分がその仕事の最初の人であると考えている (*SE* 183b16–184b8)。

それに対して『弁論術』では、既存の技術が弁論術のもっとも大切な部分であるエンテューメーマを無視してきたことを指摘して (*Rhet.* 1354a11–18)、『弁論術』第一巻第二章以降では、自分が考える弁論術が技術として打ち立てるために、他の者たちが論じることがなかったエンテューメーマについて論じている。

この二つの著作の論述から、『ソフィスト的論駁について』において問答法の理論ができ上がった後で、『弁論術』ではその問答法によって彼独自の弁論術の構築を試みようとしていると考えられる。

本稿では、以上のようにアリストテレスが問答法によって独自の弁論術の確立を目指しているという想定の下で、弁論術が持つべき重要な特徴である相手を説得する機能（能力）もまた問答法によって説明されることを明らかにしたい。

そのため本稿では、(1) まず、弁論術と問答法が取り扱う対象の範囲についての考察を通じて、弁論術と問答法が論証と対比されていることを確認する。(2) つぎに、弁論の聴衆を説得する力が弁論術に固有なものではなく、問答法にも認められることを、前提命題が真（事実）であることと共に、説得的立論を形成することが説得力に関係することを示すことで明らかにする。(3) 最後に、説得のための推論を形成するために必要なトポスについて、『トピカ』と『弁論術』のトポス

^{*1} 本稿では、問答法と弁論術の関係についてのプラトンからの影響という点は触れない。本稿ではアリストテレス自身の論述のみから『弁論術』で語られている問答法の役割を明らかにすることに集中する。プラトンとの関係については別の課題としたい。

^{*2} 『弁論術』からの翻訳の底本は、R. Kassel, ed., *Aristotelis Ars Rhetorica*, (Berlin/New York: de Gruyter, 1976) である。訳出に当たっては、G. A. Kennedy, *Aristotle. On Rhetoric: A Theory of Civic Discourse*, 2nd ed., (New York/Oxford: Oxford University Press, 2007), 戸塚七郎, 『弁論術』, (岩波書店, 1992), 山本光雄, 『弁論術』, 「アリストテレス全集」第16巻所収 (岩波書店, 1968) を参考にした。

の差異に注意しつつ論じることにする。

2 弁論術と問答法が取り扱う対象の範囲

はじめに弁論術と問答法が取り扱う対象の範囲について確認したい。というのも、すでに挙げた『弁論術』の冒頭の直後で、両者の共通点として対象について語られていることから、二つの技術が扱う対象は、重要な論点だと考えられるからである。

問答法も弁論術も、その対象は共通のものであり、すべての人々に属している。そして「特定の学知」(ἐπιστήμης ἀφωρισμένης) を対象としない (*Rhet.* 1354a1–3)。このとき、問答法と弁論術の両者は、論証と対比されていると考えられる。なぜなら、論証が対象として取り扱うものが、「特定の学知」だからである。

さらに対象については、「あるひとつの特定の類 (τινός γένους ἀφωρισμένου) も弁論術は対象としない。そうではなく、ちょうど問答法と同様なのである」と語られている (*Rhet.* 1355b7–9)。ここでも問答法と弁論術は論証との差別化によって特徴づけられている。さらに『弁論術』第一巻第二章の冒頭でも、取り扱う対象の区別に基づいて、アリストテレスは弁論術を説明している。

[T1] そこで弁論術は、それぞれのことについて、可能な説得の手段を見る能力であるしよう。というのも、このことは他のいかなる技術知の仕事でもないからである。なぜなら、他の技術知のそれぞれは、その技術知それ自体に基となっているもの〔=主題〕について教授することができ、説得することができるものだからである。たとえば、医学は健康や病気について、また幾何学は大きさに付属する属性について、そして算術は数について教授することができ、説得することができるものだからである。そして技術知や学知の残りのものどもも同様である。

しかし弁論術は、いわば「与えられたもの」について、説得の手段を見ることができるように思われる。それゆえまた、弁論術はある特定の固有な類をめぐって技術知的な方法を持たないと、われわれは言うのである。

(*Rhet.* 1355b26–34)

通常、技術知や学知は、その知の対象が特定のものに限定されている。医学は健康と病気を対象とし、幾何学や算術も同様に、特定の類を対象としている。それに対して、弁論術と問答法は、特定の類を対象とすることはない*³。

ここで注意したいのは、弁論術や問答法以外の技術知や学知でも、説得する力を持ちうるという点である。弁論術の説得が、他の技術知による説得とどのように異なるのかは、後で論じる。

以上のように、問答法によって弁論術が技術であることを説明するという役割を、アリストテレスは問答法に対して与え、そのために論証との対比も行っている。

*³ Kennedy, *Aristotle. On Rhetoric*, 38n34 にあるように、この T1 では問答法については触れられていないが問答法も同様であると考えられる。また、『ソフィスト的論駁について』のなかで問答法が論証と対比されている箇所 (170a34–39) が存在する。

3 推論と説得

弁論術の目的は、聴衆を説得することである。そのため、技術としての弁論術には、聴衆を説得するだけの理論的な説明が必要であろう。このとき、弁論術が持つ説得するための機能（力）は、弁論術に固有のものなのか、あるいは問答法によって説明されるものなのだろうか。

アリストテレスは、弁論術の最も重要な要素は、エンテューメーマであると考えている。エンテューメーマは説得的立証の本体であり (1354a15)、エンテューメーマによって説得的立証 (*πίστις*) は構成される (1356b5–7)。さらにエンテューメーマは問答法における演繹推論と対になっている (1356a35b10–17)。そのため、問答法は推論によって、弁論術はエンテューメーマによって、共に何らかの説得力を生み出すことが出来るのだと考えることができる。この点について、アリストテレスはまず、前提が真（事実）であることが説得力と関係すると考えている。

3.1 前提の真実性と説得

問答法も弁論術も他の技術と異なり、反対のものどちらをも結論として導き出すことができる (*Rhet.* 1355a33–35)。しかし、この二つの技術が推論を構成して導き出す相反する二つの結論のうち真であるものの方が推論を行いやすく、そして説得力があるものとなる。従って、真理を導き出すことができることが、弁論術と問答法が持つ技術としての説得の機能であると考えられる。

しかし、真理を導き出すという点では、問答法や弁論術よりも論証の方が強力な力を持っているはずである。必然的に真である前提から導き出された結論は、必然的に真だからである。しかし、論証は問答法や弁論術のような説得力を持たない。アリストテレスは次のように言う。

[T2] そして本性上、真理も正しさもその反対のものどもよりも強力であるゆえに、弁論術は有用である。したがって、ふさわしいやり方で裁定が行われなければ、〔弁論をしている〕その人自身が原因で〔説得力が〕弱められていることは必然である。そしてこのことは非難に値することである。さらに、幾人かの人たちに対して、極めて精確な学知を我々が持つとしても、その学知によって話すことで説得することは容易ではない。というのも、知識に即した議論は教授であり、このこと〔説得すること〕は不可能なのであり、むしろ〔多くの人々に〕共通のものどもを通じて諸々の説得的立論と議論を作らねばならないからである。ちょうど『トピカ』においても、我々は多くの人たちに対しての討論について述べていたように。 (*Rhet.* 1355a20–29)

真理や正しさは、弁論術の有用性の理由となる。しかし、その真理や正しさは、多くの人々に共有され受けいられているものでなければならない。論証で用いられる程に精確であっても、弁論を聞く大衆が真であると受け入れられるものでなければ、説得に用いることができない。そのために論証は人を説得することには不向きである。

それに対して問答法も弁論術も、人々がそうだと受け入れている見解（エンドクサ）から出発

する．単純に真実であるから人を説得しやすくなるのではなく，真である上に相手に受け入れられる前提から出発することで説得力が生じるということである．

3.2 「相手の考えを変えさせる」機能

さて，真であり相手に受け入れられることから出発して，相手を説得することが説得のために必要である．一般的に言って，この主張自体はごく常識的な見解であろう．しかし，説得とは，説得する相手が受け入れている事柄を前提として，相手が受け入れている結論を受け入れさせることであるように思われる．前提だけでなく，導き出す結論もまた説得以前に相手が受け入れているなら，そもそも弁論術は必要ないだろう．もともと受け入れている結論を，相手が考えを変えて受け入れるようになることが，弁論術に求められる機能である．

この「相手の考えを変えさせる」という点に関して、『トピカ』では次のように言われている．

[T3] 討論のために役に立つというのは，多くの人々の見解を枚挙した上で，〔その人たちとは〕他の人々の考え方に基づくのではなくて，その人々自身の考え方に基づいて，適切に語っていないと我々に思われることは考えを変えさせながら，彼らと話しあうことができるだろうからである，(Top. 101a30–34)*⁴

この T3 は，討論のために問答法が役に立つという説明である．先の T2 の中で『トピカ』への言及が行われていたが，この T4 がその該当箇所であると考えられる．ここで問答法は，相手の考えに基づきながら，相手の考え方を変えさせることができると言われている．

さらに関連する箇所として『エウデモス倫理学』のある箇所を取りあげる．この箇所は，問答法の役割を論じるために神崎*⁵や Smith*⁶が言及している箇所である．

[T4] そして，これらのことすべてについて，証拠や例証として，そうであると見える事柄を用いながら，議論を通じて説得的立証 (*πίστιν*) を探求することを試みなければならない．というのも一方で，語られようとしていることどもにすべての人が明らかに同意していることが最も素晴らしいことであるが，もしそうでないならば，ある仕方では，人々は考えを変えながら，同意するだろう．というのも，各々の人は，真理に対して何か固有のもの〔考え〕を持っており，それらから始めて，問題となることどもについて何らかの仕方では，証明をしなければならないからである．すなわち，真であるが明瞭でない仕方では語られたことどもから始めて先に進み，混乱した仕方では語られ慣らされたものをより判明なものに入

*⁴ 『トピカ』および『ソフィスト的論駁について』の底本は，W. D. Ross, ed., *Aristotlis Topica et Sophistici Elenchi*, Oxford Classical Texts (New York: Oxford University Press, 1963) である．訳出にあたっては主として，池田康男，『アリストテレス『トピカ』』，西洋古典叢書，(京都大学学術出版会，2007) を参考にした．

*⁵ 神崎繁，「『哲学史』の作り方 ―生きられた「学説誌 (Doxographia)」のために」，神崎繁・熊野純彦・鈴木泉 (編) 『西洋哲学史 I』，(講談社，2011)，401–402 ．

*⁶ R. Smith, “Dialectic and Method in Aristotle,” in M. Sim (ed.) *From Puzzles to Principles? Essays on Aristotle’s Dialectic*, (Lanham, 1999), 41–42.

れ替えていくことで、明瞭なものにもなるだろうからである。(EE 1216b26–35)^{*7}

この T4 では、問答法的な手続きによって、真ではあるが不明瞭故に同意できないことが、整理されることで明瞭になり同意できるものになるという説明が行われている。このような手続きが、弁論術でも用いられる証拠や例証を用いた議論を通じて、説得的立証を構築する試みとして捉えられている。この『エウデモス倫理学』の説明は、問答法だけでなく弁論術がもつ説得の力を説明したものと解釈できるだろう。

このように、相手を説得するためには、真実(事実)を語ることが重要であるが、それだけでなく弁論術と問答法のどちらも、相手を説得するための機能をもつと考えられる。この機能は、説得的立証、つまり推論を構築することで実現すると考えられる。

そして問答法や弁論術の推論は、トポスに基づく推論である。ただし、同じトポスに基づく推論であっても、『トピカ』と『弁論術』では、トポスの取り扱い方が異なる。

4 『トピカ』と『弁論術』のトポスの相違

『トピカ』の問答法において、推論の前提命題の述語は、定義項、類、固有性、付帯性のいずれかを表すと説明される。そしてこの四つ(述語様式^{*8})は定義上、排他的で網羅的な関係にある(*Top.* 101b17–28)。そして、『トピカ』の問答法の推論は、推論によって考察対象となる命題の述語がこの四つのうちのどれを表すのかを目指すものである。

そのため『トピカ』で列挙されるトポスもこの述語様式に即して分類されている。Smith が指摘するように、述語様式とその定義が、トポスに対して上位に位置していて、諸々のトポスを組織化している^{*9}

これに対して『弁論術』のトポスは、述語様式とは無関係である。そのかわり、共通のトポスと固有のものという対比が行われる。

アリストテレスが「共通のトポス」として考えているものは、たとえば「より多く」や「より少なく」というトポスである(*Rhet.* 1358a14)。このトポスを少し形式化して述べるなら、「もし C と比べて A が B により多く帰属することが可能な場合に、実際には A が B に帰属していないならば、C もまた B に帰属してはいない」というものになる^{*10}。

この「共通のトポス」をアリストテレスは『弁論術』第二巻二十三章で論じている。そこでは、「より多く」や「より少なく」というトポス以外にも、「反対」のトポス(*Rhet.* 1397a7ff.)や「語尾変化」のトポス(*Rhet.* 1397a20ff.)についても述べられている。これらのトポスの例を見る限

^{*7} 底本は、Walzer, R. R., & J. M. Mingay, *Aristotelis Ethica Eudemia*, Oxford Classical Texts (New York: Oxford University Press, 1991) である。訳出にあたって、神崎, 「「哲学史」の作り方」, 401–402 を参考にした。

^{*8} この呼称は池田, 『アリストテレス『トピカ』』, 404 に基づく。

^{*9} R. Smith, *Aristotle: Topics Books I and VIII, with excerpts from related texts*, Clarendon Aristotle series (Oxford: Oxford Clarendon Press, 1997), xxx.

^{*10} 『弁論術』第二巻二十三章 1397b13–15 に基づいて形式化した。

り、共通のトポスは、推論を構成するために用いる推論規則のようなものである。

それに対して個別の主題についてのトポスをアリストテレスは「固有なトポス」と呼んでいる^{*11}。この固有なトポスは推論の前提命題であるたり、推論規則と捉えられる共通のトポスとは明確に異なる。アリストテレスは、固有なトポスは、よりよく前提を選び、その内容をより精査することで、問答法や弁論術の前提ではなく論証の原理となり得ると説明する (*Rhet.* 1358a23–24)。

このことから共通のトポスは、問答法の推論やエンテューメーマの推論としての形式を与え、固有なトポスは前提として推論の内容を与えていると言えるだろう。

このような固有なトポスと共通のトポスの区別は、『トピカ』においてそのままの形では存在しないが、関連すると考えられるのは『トピカ』第三巻である。

というのも『トピカ』第三巻第一章から第四章で挙げられているトポスのいくつかは、『弁論術』第一巻第七章で挙げられている固有なトポスと重なる部分があるからである。

さらに『トピカ』第三巻第五章の冒頭でアリストテレスは、「そして「より多く」や「より大きい」についてのトポスを、できる限り普遍的な仕方では把握すべきである。というのも、そのような仕方では捉えられたトポスは、多くのことに対して役立つだろうからである」と述べる (*Top.* 119a12–13)。このようなトポスを普遍的に把握して利用する場合が、『弁論術』の共通のトポスに対応するように思われる。

さらに、『トピカ』第三巻第六章では「そして諸々のトポスのうちでとりわけ利便性が高く、共通のもの (*κοινὰ*) は、対立関係や同列語や語尾変化に基づくものである」と述べている (*Top.* 119a36–38)、これは『トピカ』第七巻第四章でもほぼ同じ主張が繰り返されている (*Top.* 154a13–15)。このように、アリストテレスは『弁論術』における共通のトポスに対応するものを『トピカ』において想定していたと考えられる。

そして、このような固有なトポスと共通のトポスは、すでに論じた説得の力を提供するものであると思われる。

固有なトポスは、前提命題をより精査することで論証の原理となり得る。別の見方をすると、このような前提命題としての固有なトポスは、真ではあるが論証の前提ほどには精確ではないものとして弁論術や問答法に必要とされるものであるということである。

その一方で共通のトポスは、相手の考えを変えるための推論を構築するための形式的な規則を与えてくれるものだと思えることができるだろう。

^{*11} 固有なトポスについては、そもそもこれがトポスと呼ぶべきものであるのかについて異論が存在する。というのも「固有なトポス」という表現に合致するような表現 *ἴδιοι τόποι* は『弁論術』の中に存在せず、ただ *ἴδια* と呼ばれるだけだからである。Rubinelli はこの点を繰り返し強調し、彼女は *ἴδια* はトポスではないという立場をとる。そして、*ἴδια* と呼ばれているものは、特定の内容を持つ命題であり、構造を提供するトポスではない。この *ἴδια* は、『トピカ』105a21–27 で語られている構造に内容を与える「道具 *organon*」と関連付けられるべきものであると、Rubinelli は解釈する (S. Rubinelli, “*Τόποι* e *ἴδια* nella Retorica di Aristotele.” in *Phronesis* 48, no. 3 (2003), 239–245)。

しかし本稿では、『トピカ』第三巻に関連する箇所があることから、*ἴδια* をトポスと解釈する。これは多くの解釈者とする道であり、その中でも Grimaldi の解釈が有力である (W. M. A. Grimaldi, *Aristotle, Rhetoric I: A Commentary*, 1st ed. (New York: Fordham University Press, 1980), 349–354)。

5 まとめ

以上のように、アリストテレスは弁論術を問答法が類似していることから、問答法によって彼の考える弁論術を特徴付けようとしている。そして、弁論術が目的とする説得も、問答法が持つ機能によって説明される。そして相手を説得するための推論は、固有なトposと共通のトposによって与えられるのである。

このような問答法による弁論術の説明は、常に論証との対比で行われている。アリストテレスは弁論術と問答法を論証との違いによって説明している。そして同時に、固有なトposについての説明からわかるように、論証と弁論術や問答法は異なるものでありながらも繋がっているとも言える。このような論証理論が弁論術や問答法との繋がりは注目すべきことであると思われるが、この点を明確にするのは今後の課題としたい^{*12}。

^{*12} 本稿は平成 26 年度日本哲学会林基金若手研究者研究助成の助成を受けたものである。